

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26360008

研究課題名（和文）中国多民族集住地域における社会主義的近代の経験と民族の共同性に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological study about experiences of socialist modernization and communality of ethnic minorities that have lived together in North China

研究代表者

坂部 晶子（SAKABE, Shoko）

名古屋大学・国際開発研究科・准教授

研究者番号：60433372

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）： 中国内モンゴル自治区フルンボイルの多民族集住地域において、社会主義中国の政府によって「制度化された多民族性」の時代を生きてきたオロチョン、エヴェンキ、モンゴル、ダウルなどの少数民族にとっての民族文化への意識や歴史的経験を、彼らの語りの再構成をとおして当事者の視点から提示した。またマクロな支配権力の変転のなかでの生活変容と民族間関係の絡まりあいの複雑さについて、「社会主義的近代」を切り口として分析した。

研究成果の概要（英文）： This research project traced the consciousness of their own ethnic cultures and their historical experiences from their perspectives of the ethnic minorities who have lived on the 'institutionalized multi-ethnicity' era by Communist China. I showed the ethnic minorities: Orochon, Evenki, Mongol and so on, have experienced huge transformation of lives and analyzed complexity of the relation between some minority groups through the angle of 'socialist modernization'.

研究分野：社会学

キーワード：フルンボイル地域 少数民族 制度化された多民族性 社会主義的近代

## 1. 研究開始当初の背景

「中国多民族集住地域における社会主義的近代の経験と民族の共同性に関する社会学的研究」というテーマにかんして、研究開始当初の学術的な背景としては、以下の三つの分野が想定されていた。

一つ目は、中国国内での独自の民族学・人類学である。中国の民族学、人類学は、その研究の枠組みは国家の民族政策の枠内であるとはいえ、大規模な少数民族から人口数千人の小規模な少数民族に至るまで、その伝統的生活形態や言語、習俗、民族の起源などについて資料や調査が蓄積されている。一方、1980年代以降には世界的な学問潮流を意識したかたちで、多民族国家としての「民族」理論の再検討も盛んに行われている。代表的なのは費孝通の「中華民族多元一体構造論」だが、そこでは、広い意味での社会構築主義を視野に入れた、「民族」の社会的構成を基礎にした理論構築がなされ、中国社会の統合理論として注目されてきている。しかし、これらの民族理論や民族誌は、社会主義中国成立以降の民族認定による枠組みと融和的な諸民族間関係を前提としている。そこでは、現在の中国独特の民族状況をもたらした半世紀あまりの社会主義時代の経験そのものが対象化されてはいない。

二つ目は、本研究が対象とする中国東北地域にかんする近現代史である。中国東北近現代史の主たる研究対象は、植民地「満洲国」期の事象である。そこでは、中国内外の研究として、植民地化のプロセスを一種の長期的な近代化の視点から分析する研究も行われてきたが、これらの研究の焦点は、漢民族を中心とした中国社会全体の近代化プロセスであり、多民族状況にたいする視点は希薄であった。一方近年、日本のモンゴル史研究では、東北地域の社会主義化がモンゴル族の生活空間に与える影響が検討され始めている。これらは、「制度化された多民族性」の背後にあるマジョリティと少数民族との構造的権力関係をとらえ、社会主義時代の表面化されにくい現実（圧政や対立）をとらえている点で注目に値する。ただし、そこでは構造的な強者である為政者側の政策批判が大きく、少数民族としてのモンゴル族が社会主義政権下の近代化を総体としてどのようにうけとっているのか、さらには多民族地域の諸民族間の内部の多様性にまで言及されることは稀である。

三つ目の研究領域として、本研究が重視するのは、ポスト社会主義人類学である。ポスト社会主義人類学は、ソ連邦解体後の、ロシアや周辺諸国での人類学的研究に端を発している。そこでは、資本主義圏の民族地域における伝統と近代といった対立とは異なり、「制度化された多民族性」が前提とされ、国家の認定民族としてすでに数十年間「西側的ではない近代」が生きられてきた。現在、改

革開放政策により政治的側面以外は市場化され資本主義的近代へと近づきつつある中国では、ソ連邦崩壊前後の民族状況と共通する部分があり、これまでの社会主義的近代では一定程度維持されてきた民族言語や生業、伝統的な生活形態が急速に喪失されつつある。ポスト社会主義人類学の研究視点は、こうした研究状況にたいして、中国の社会主義的近代を分析するうえで新たな視点を提供する。本研究は、新中国成立以降の社会主義確立期から文化大革命までの期間を、中国の「社会主義的近代」の時期としてとらえ、それ以降の改革開放期は、「社会主義的近代が変容していく期間」と設定することにより、とくに多民族集住地域における、諸民族間の関係を対立や葛藤も内包した民族の共同性のあり方に着目し、これらの経験を対象化していくことを企図したものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、改革開放期以降大きく社会が変貌しつつある中国内モンゴル自治区フルンポイルの多民族集住地域において、社会主義中国の政府によって「制度化された多民族性」の時代を生きてきた少数民族自身の生活世界を再構成することで、彼らの対立や葛藤を含んだ民族的な共同性を描きだすことをめざすものである。本研究の対象地域は、伝統的にモンゴル世界と中華世界の境界領域（遊牧地域と農耕地域の境界）であり、さらに、近代に入ってから、ロシアおよび日本の帝国主義がぶつかりあう境界線ともなった。歴史的に大きな変動を経ながら、ここではそれぞれの社会のなかで周縁的な小規模な諸民族が、帝国主義期・社会主義期をとおしてその生活圏を接触させたり重ね合わせたりしながら生を営んできている。本研究のねらいは、各民族間の対立そのものも内包した自生的な民族共同の生活経験から、従来の統合原理とは異なる生活者レベルの共生の論理を抽出することをめざすものである。

上記の研究目的を達成することにより、以下のような研究史上の意義が考えられる。まず第一に、現在の急速な社会変化の過程における少数民族地域の生活と意識の変容を、社会主義的近代の変容として対象化する点である。これまで少数民族の社会生活の変化は、飲酒や低い就学率、民族言語の不継承など当該民族の問題（遅れ）として分析されてきた。本研究では、それをよりマクロな社会変容のもとで分析する視点を準備する。

第二に、多民族集住地域での民族の共住や共同のあり方を、具体的、実証的に記述する点である。これまで中国の多民族の集住状況についての実証的な研究は数少ない。また民族理論としては民族間関係が調和的であることがア priori に設定されている。本研究は、こうした官制の民族の共同性とはことなる当該地域に自生的な民族間関係のあり方

を抽出することで、周縁化されてきた諸民族の生活世界を分析する視点を提起できると考えている。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、主としてフィールドである中国内モンゴル自治区フルンボイル地域における現地調査を中心としている。具体的な作業および研究方法として、以下の三つのフェーズの調査を行った。

(1) 第一フェーズは、新中国成立以降の各民族の通時的資料の収集分析である。当該地域の民族としては、主要なものとしてオロチョン族、エヴェンキ族、ダウール族、モンゴル族、漢族、またごく少数のロシア族、さらにブリヤート族などが居住している。これらの各民族について、できるだけ網羅的に資料収集を行った。

(2) 第二フェーズは、各民族の生業の変化と、都市 農村(牧区、林区)との生活の相違にかんするフィールドワークである。長期的なスパンでいえば、これらの地域では、遊牧あるいは狩猟採集といった生業形態にたいして農業が侵食しつつある。さらに改革開放期以降では第三次産業の増加も著しい。ここでは、主として以下の二つの軸を中心に現地調査を行った。遊牧地域、狩猟地域のそれぞれにおいて、生業の変化と時期、そのプロセスについて聞きとり調査を行った。都市部(小鎮レベル) 農村(牧区、林区)との生活の相違について、生業地域ごとに現地調査を行った。これらの作業から、隣接民族間での生業にかんする影響関係および同民族内部での生活条件の格差について一定のデータを得ることができた。

(3) 第三のフェーズは、それぞれの民族集団のいくつかの年齢層の人びとのライフヒストリーの収集と分析である。各世代への聞きとり調査により、新中国設立以降から現在までのあいだ、それぞれの民族の人びとの生活環境や社会環境、歴史的経験、また当事者としての意識や希望といった社会意識の変化について、典型的に抽出分析できる。これらの個別の経験とマクロな社会環境の変化についての分析を重ね合わせることにより、当該地域の社会主義的近代のもたらす意味について立体的に把握することをめざした。

### 4. 研究成果

本研究では、中国内モンゴル自治区フルンボイルの多民族集住地域において、少数民族自身の歴史的経験や社会変容についての語りをとおして彼らの生活世界を再構成することにより、社会主義中国の政府によって「制度化された多民族性」の時代を生きてきた少数民族自身にとっての社会主義的近代の意味にアプローチする方法をとった。そこでは、以下のような論点が明らかとなった。

その成果の一部は以下の業績集の中で発表されている。

#### (1) 民族的伝統の復活、継承、消滅への危機、伝統の再形成

フルンボイル地域には、オロチョン、エヴェンキ、ダウールという北方に主たる生活領域がある三小民族、および満洲族やモンゴル族などの北方の中心的な少数民族、また中国社会では公定民族ではないが、モンゴル族の一部をなすブリヤート、またロシアからの移住者の子孫であるロシア族など、多様な民族が生活している。また近年では、漢民族や朝鮮族などの農耕を主たる生業としてきた民族も激増している。これらの地域において、従来の社会主義的近代の時期には、民族的な祭事やイベント、信仰は一定の規制がかけられていた。民族的な祭事が復活してくるのは改革開放期が進展した1990年代くらいからであり、チベット仏教やシャーマニズムなどへの信仰は、文化大革命などの時期には大きなダメージを受けており、現在、いくつかの寺院等は修復され、信者を集めるようになりつつある。

総じていえば、これまで鎮静化されてきた民族文化が、少しずつ復興し始めている。それは、オロチョン自治旗の篝火節やエヴェンキ族自治旗の民族祭などのように、政府主導の民族文化の祭典の復興のかたちをとるものと、モンゴル族やダウール族などのオボ崇拜の祭典や仏教寺院の再建などのように、民間主導で進展するものとに分けられる。

ただし、民族文化の復興とはいっても、数十年間のブランクがある事象も多く、昔のままに執り行われ、継承されているというよりは、現代的な新しい意匠をまとっている。民族文化の象徴的意味をもつものとして、政府系の指導と民間とのあいだに協力関係がみられるものもあることが確認できる。

#### (2) 改革開放期における生業と生活様式の変容と、社会主義的近代の意味についての分析

改革開放期の進展は、フルンボイル地域の民族文化だけでなく、少数民族の生業にたいしても大きな変容を与えるプロセスであった。民族文化や信仰などと異なり、周辺領域で生活を営んできた少数民族の従来の生業や生活様式は、一定の近代的な制度(医療や学校など)の普及と社会主義的な施策(集団化など)を除けば、中国の「社会主義的近代」時代にはさほど大きく変化していない部分がある。確かに、山中での移動生活や狩猟などは、少しずつ定住化へ向ける努力は行われてきたが、改革開放期以前にはそれらは完全には達成されていなかった。しかし、80年代、90年代以降の時期、市場化が進むと草原地域における資源開発や観光化などの市場メカニズムが進展し、従来の生活形態が大きな変容を被ってきている。

遊牧や牧畜を主産業とする牧地にせよ、狩猟採集や林業を主産業としてきた森林地帯にせよ、小城鎮に居住する人びとと、牧地、森林の周辺部に居住する人びととは、現時点での生活状況についても、あるいは生活変容についても大きな差異がみられる。小城鎮である地域の中心地帯で生活するのは、商店や学校、政府の関係者などであり、周辺領域には従来型の牧民が多く生活している。社会主義的近代は、中国の周辺領域にまで近代化の施策を届けたが、それはこの中心地域までであることが多い。牧地に生活し続けてきた人びとは、電気や道路などのインフラが到達したのが数年前であったり、農業を行わない地域では10数年前まで「茄子」という野菜を見たことがなかったりと、生活状況にも大きな格差があった。

近年の改革開放で周辺領域にも開発の進展がみられるが、そのため従来の生業だけでは生活ができなくなる場合や、商品経済のなかで搾取され、だまされるなどの事例も確認される。また若者世代では可能であれば、地域の中心地での仕事、ことに政府系の末端の官吏等の仕事が歓迎されていることが確認できる。

### (3) 折り重ねられた歴史の地層と民族間関係、および今後の展望

当該地における民族間関係を考えるときに重要なのは、前近代から近代に至る統治権力の諸相である。清朝期には統治者である満族の政権があり、モンゴル族やオロチョン、エヴェンキなどの少数民族もその体制に組み込まれていた。またオロチョンやエヴェンキなどはバイカル湖周辺から移動してきたとされているが、それはロシア帝国の東進政策が影響していると考えられる。さらにロシアの革命の成立や周辺のモンゴル国への介入等により、一部のモンゴル人やブリヤート人等も現在の居住地へ流入してきた。また鉄道敷設により人流が大きくなり、満洲国時代には国境警備も厳格になっていった。現在のフルンボイルの中心地であるハイラルは、鉄道沿線の要衝であり、満洲国期には対ソ戦用の巨大な要塞が築造された。

新中国以降には、大興安嶺の豊富な森林資源に対して林業を主とする人びとの流入があり、また中国でも一、二を争う豊かな草原が残されていることから南方からのモンゴル人や農耕民族の流入も続いた。現在は地下資源の開発なども進められており、地域の人口は増加し続けている。多数の民族が雑居する周辺部において、新中国成立直後のハイラルでの主要言語はダウール語であったといい、その後内モンゴル自治区としてモンゴル語が主要言語となる。しかし現在では都市部においては漢語が中心となっており、これらの変遷が権力関係の実質的な移り変わりを映し出している。

草原地帯においてもモンゴル族のあいだ

にエヴェンキ族の小集団が居住する場合があります。またモンゴル族同士でも出身部族によつての差異が見られる。これらの民族間の関係は流入時期や土地取得等の関係などと絡まりあって、単なる協力関係のように一元的に理解できるものではないことが明らかとなった。

これらの研究成果を踏まえて、今後の展望としては、社会主義的近代の時期の実質的な生活変容の実態をより精密に検証すること、またより長期的な近代化プロセスの与えた影響を視野にいれた分析が必要となる。

なお、下表は本研究課題において調査を行った地域とその調査内容について、まとめたものである。

調査地	対象・場所	調査内容
内モンゴル自治区フルンボイル市	エヴェンキ族の若者たちの同年グループ	生活状況、ライフヒストリー、民族意識や現在の民族文化保護にたいする見解
	漢族の映像研究者(兼映像作家)	ライフヒストリー、民族意識や現在の民族文化保護にたいする見解
	ブリヤート族の俳優	生活状況、民族意識や現在の民族文化保護にたいする見解
	仏教寺院	参与観察および現在の信者の状況についてのインタビュー
	伊敏河民族音楽団の集会所および団員自宅	リハーサルの参与観察、および民間楽団結成の経緯についてのインタビュー
	モンゴル族の年配女性	ライフヒストリーの聞きとり
	ダウール族のキリスト教信者	ライフヒストリーの聞きとり
新巴爾虎左旗	諾門汗戦争記念館	展示資料の調査
	牧民自宅	生活状況とライフヒストリーの聞きとり

新巴爾 虎右旗	観光施設、牧 民自宅	モンゴルゲル 宿泊施設の参 与観察および インタビュー
	陳巴爾 虎旗	モンゴル族 女性
海拉爾	ライブハウ ス	モンゴル・バ ンドの公演調 査
	エヴェンキ 族幹部	当人のライフ ヒストリーお よび父親世代 の歴史経験の 聞きとり
	モンゴル族 作家	情報収集
	エヴェンキ 族若者	情報収集
	エヴェンキ 族観光ガイ ドの若者	ライフヒスト リーの聞きと り
	モンゴル族 画家	ライフヒスト リーの聞きと り
滿洲里 市	観光施設	現地調査
呼 和 浩 特 市	内モンゴル 師範大学	モンゴル仏教 の研究者、少 数民族文化の 研究者への情 報収集
	市内(周辺地 域からの移 住者自宅)	モンゴル族の 年配女性への 聞きとり調査
	市内	農業指導者へ の聞き取り調 査

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

李・額勒斯(作) 坂部晶子(訳・解説)  
「ナンスルマ 中国内モンゴルの漢語  
作家によるモンゴル文学」、『21世紀東ア  
ジア社会学』第8号、2016年6月、査読  
有、225 - 240頁。

坂部晶子、「中国北方民族オロチヨンの民  
族イベントにおける『伝統』意識 建旗

60周年記念大会を事例に」、『北東アジア  
研究』第26号、2015年3月、査読有、1  
- 17頁。

URL( <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/41kenkyu/kenkyu26.html> )

〔学会発表〕(計 9 件)

坂部晶子、「満洲国・帰国者の歴史をと  
おしてみる日中交流 日中における『満  
洲』経験の記憶化の相違」、ぎふ星友会(於  
岐阜メディアコスモス) 2017年3月26  
日。

坂部晶子、「中国周辺地域における社会主  
義的近代とジェンダーにかんする研究視  
点」、中日学術シンポジウム及び中日社会  
学専門委員会成立大会(於北京第二外国語  
大学) 2016年11月13日。

坂部晶子、「日中における植民地・戦争期  
の記憶と地域における記憶」、『北東アジア  
における『心の問題』の生成・展開と展望  
に関する研究』プロジェクト(於島根県立  
大学) 2016年2月12日。

坂部晶子、「『満洲』開拓移民の記憶と日中  
二つの村の近代」国際ワークショップ「移  
民送出国としての中国・移民受け入れ国と  
しての中国 人口移動を事例研究から  
考える」(於名古屋大学) 2015年10月  
16日。

坂部晶子、「満洲引揚者女性の『逃避行』  
の語り口」龍谷大学シンポジウム「女たち  
の翼 前世紀転換点のアジアにおける  
女のリテラシーと境界侵犯的活動」(於龍  
谷大学梅田キャンパス) 2015年3月12  
日。

坂部晶子、「少数民族 移動する人々の  
生活史」、『二〇世紀東アジアをめぐる人の  
移動と社会統合に関する総合的研究』満洲  
班 第1回ワークショップ「20世紀『満  
洲研究』の到達点と今後の課題 『満洲』  
の解体と再構築をめざして」(於上智大学  
大阪サテライト) 2015年2月22日。

坂部晶子、「中国から見た村の近代化と藤  
原長作さんの功績」、藤原長作さんの中国  
での米作りに学ぶシンポジウム(西和賀町  
国際交流協会)(於西和賀町) 2015年2  
月13日。

坂部晶子、「日本と中国から見た満洲開拓  
の記憶」、『帝国日本における移動と他者  
像』第5回研究会(於県立広島大学) 2014  
年11月9日。

坂部晶子、「復興する民族イベントにみる

少数民族の伝統意識 オロチョン自治旗を事例として』、日中社会学会第 26 回大会（於大同大学）2014 年 6 月 8 日。

〔図書〕（計 2 件）

西村大志・松浦雄介編（著者は編者および坂部晶子他 16 名）『映画は社会学する』、法律文化社、2016 年 7 月、全 256 頁中 61 - 72 頁。

貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編著（著者は編者および坂部晶子他 4 名）『記憶と忘却のアジア（相関地域研究シリーズ）』、青弓社、2015 年 3 月、全 248 頁中 143 - 163 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂部 晶子（SAKABE Shoko）

名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授

研究者番号：60433372